

# 中国における『華嚴經』の研究講説

佐藤心岳

『華嚴經』は、インド僧ブッダバドラ (Buddhabhadra 仏駄跋陀羅、覺賢) によって西暦四二〇年に『大方広仏華嚴經』六十卷として揚州 (江蘇省江寧県) において訳出され、ついで、中央アジアのコータン出身のシクシャーナンダ (Sikṣānanda 実叉難陀、学喜) によって西暦六九五年から六九九年にかけて『大方広仏華嚴經』八十卷として洛陽 (河南省洛陽県) の大遍空寺および仏授記寺において訳出された。また、この經典は、インド僧プラジュニヤ (Prajña 般若) によって西暦七五九年から七九八年にかけて『大方広仏華嚴經』四十卷として長安 (陝西省長安県) の崇福寺において訳出されたが、しかし、これは、前述の『六十華嚴』および『八十華嚴』の「入法界品」に相当する「入不思議解脱境界普賢行願品」から成っている。

『華嚴經』は、短期間に一つのまとまった經典として成立したのではなく、もともとインド文化圏において個々に成立して流布していた同系統の諸經典が集められて編纂されたものである。この經典は、中央アジアのコータン (Khotan 于闐) において現在みられるようなかたちに編纂されたと考えられている。のちに、この經典は、中国

に伝えられて、盛んに研究され講説されて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼして、ついに中国では華嚴宗が成立するにいたった。そうして、『華嚴經』の思想がわが国に伝えられて、日本仏教の發展に大きな役割を果たしたことは周知の事実である。

ところで、『華嚴經』は、中国においては実際に、いつごろ、いかなる地域に伝えられて、研究され講説されて、人びとの思想信仰を育んだのであろうか。その実情はかならずしも明らかではない。それゆえに、その実情の一端を明らかにするために、ここでは、中国における『華嚴經』の研究講説の実情をとくに六朝時代および隋唐時代を中心として検討してみようとおもう。

## 二

『華嚴經』は、六朝時代においては、中国のいかなる地域に伝えられて研究され講説されたのであろうか。それは、主として鄴、嵩山、および建康を中心とした地域においてであったと考えられる。そうして、この時代においてこの經典の研究講説に関係のあった人物としては、智脱、洪遵、僧範、慧順、僧達、および慧勇が伝えられている。しかし、これらの人物のうちで、智脱と洪遵とは、実際に、この經典の研究講説に従事したのではなく、この經典の研究講説がおこなわれていたところで、その思想的影響を受けた人物であるが、ここで取り上げることにした。

また、隋唐時代を通じて『華嚴經』の研究講説がおこなわれたのは、主として長安、終南山、并州、河東、鄴、汴州、襄州、江都、常州、越州、および余姚を中心とした地域においてであったと考えられる。そうして、この時

代においてこの經典の研究講説に従事した人物としては、慧遠、道瑗、道貴、靈幹、彭淵、普濟、普安、靈裕、慧賞、智瑀、吉藏、行等、慧眺、法敏、慧覺、惠仙、智正、弘智、神照、および慧持が伝えられている。

東魏の首都鄴（河南省）において『華嚴經』の思想的影響を受けた人物としては、智脱が挙げられる。

智脱は、俗姓を蔡氏といい、その祖先は濟陽考城（河南省考城縣）の人で、東魏の興和三年（五四一）に生まれ、隋の大業三年（六〇七）に六十七歳で歿した。かれは七歳で出家して、東魏の首都鄴の願法師の弟子となった。当時、願法師は『華嚴經』や『十地經』の研究では最もすぐれた業績をあげていた<sup>④</sup>。ついで、かれは江都の強法師について『成実論』や『毘曇論』の講説を聞き、また丹陽の莊嚴寺の燭法師のところへ行つて教えをうけた。

陳の至德年間（五八三—五八六）に、智脱は宮中に招かれて仏典の講説をおこなったが、その後、煬帝に従つて隋の都長安にはいり、日嚴寺に住してもっぱら仏典の研究講説につとめた。そうして、かれは『大品』『涅槃』『淨名』『思益』などの諸大乘經典の講説をおこなったと伝えられている。

このように、智脱は、東魏の首都鄴において師の願法師による『華嚴經』の研究講説によってその思想的影響を受けたと考えられるが、しかし、それ以外のところで、かれがこの經典の思想的影響を受けたということは明らかではない。したがって、智脱が師の願法師によって『華嚴經』の思想的影響を与えられたのは、東魏の首都鄴においてであつたと考えて大過ないであらう。

東魏時代の嵩山（河南省）において『華嚴經』の講説がおこなわれ、その聴講に關係のあつた人物としては、洪遵が挙げられる。

洪遵は、俗姓を時氏といい、相州（河南省臨漳縣）の人で、北魏の建明元年（五三〇）に生まれ、隋の大業四年

(六〇八)に七十九歳で歿した。かれは八歳で出家して、もっぱら律部を学んだ。かれは初めに嵩山(河南省登封県北)の少林寺に住し、雲公に依資して『華嚴經』などの講説を聞いた<sup>⑤</sup>。

ところで、洪遵が嵩山の少林寺において『華嚴經』の講説を聞いたのは、いつごろのことであったのであろうか。洪遵が出家したのは八歳のときで、それは、ちょうど東魏の天平四年(五三七)に相当する。したがって、かれが少林寺においてこの經典の講説を聞いたのは、西曆五三七年以後のことである。

その後、かれは勉強のために北齊の鄴都へ行つたと伝えられているから、かれが少林寺において『華嚴經』の講説を聞いたのは、少なくとも東魏時代であつたと考えられる。そうして、かれは隋代には長安の大興善寺に住していたので、かつて『華嚴經』の講説を聴講したことのあるかれがこの地方の人びとに対してこの經典の思想的影響を与えたことは、充分にありうることである。

東魏北齊の首都鄴(河南省)において『華嚴經』の研究講説をおこなつた人物としては、僧範と慧順が伝えられている。

僧範は、俗姓を李氏といい、平郷(河北省平郷県)の人で、北魏の承明元年(四七六)に生まれ、北齊の天保六年(五五五)に八十歳で歿した。かれは二十九歳のときに『涅槃經』の講説を聞いて、仏教の真理のすばらしさを知り、ついに鄴城(河南省臨漳県)の僧に投じて出家した。かれは最初に『涅槃經』を学んで、その真実の意義を理解して、都会の雑踏をさけて山藪に隠栖したが、のちに、北魏の洛陽に出て、献公について『法華經』や『華嚴經』などの講説を聞いて、仏典の理解につとめた<sup>⑥</sup>。これによって、僧範は北魏の洛陽においてまず『華嚴經』の知識を得たことが知られる。

そののち、僧範は、膠州（山東省膠県）の刺史杜弼という人の招請によって、鄴の顕義寺において『華嚴経』の講説をおこなった。かれはまた『十地』『地持』『維摩』『勝鬘』などの諸大乘経典とともに『華嚴経』を講説して、それぞれその注釈書を著わしたと伝えられている。

ところで、僧範は、この『華嚴経』の注釈書をいつごろどこで著わしたのであろうか。それは、東魏北斉の首都鄴においてであつたと考えられる。かれは二十九歳で出家して、一時、山林に隠棲したことがあつたが、北魏の洛陽で仏教の研究に従事したのには、主として東魏北斉の鄴都の仏教界において活躍した。かれが東魏北斉の鄴都の仏教界において活躍したのは、北魏が東西兩魏に分裂して鄴が東魏の首都になった西暦五三四年からかれが鄴東の大覺寺において八十歳で亡くなった西暦五五五年に至るまでの約二十一年間である。東魏北斉の鄴都の仏教界では、仏教は隆盛を極めていた。そこで、僧範は熱心に『華嚴経』の研究講説をおこなっていたから、かれがこの時代に鄴都においてこの経典の注釈書を著わしたことはまちがいないとおもわれる。

慧順は、俗姓を崔といい、斉（山東省臨淄県）の人で、正確な生存年時は不明であるが、東魏北斉時代の人である。かれは北斉の鄴都において七十二歳で歿したと伝えられている。かれは熱烈な仏教信者侍中崔光の弟で、二十五歳のときに洛陽へ行って慧光律師に投じて出家した。

北魏が西暦五三四年に東西兩魏に分裂して相對峙するに至ると、それまで北魏の仏教都市として繁栄を誇っていた洛陽は、急速に衰微していった。そうして、洛陽は東西兩魏軍が争奪する戦場となつたので、慧順は、洛陽在住の多数の名僧学者とともに東魏の首都鄴へ移住した。

東魏北斉の首都鄴では、慧順は『十地』『地持』『維摩』などの諸大乘経典とともに『華嚴経』の研究講説をお

こなつて、それぞれその注釈書を著わした。<sup>⑧</sup> かがひとたび仏典の講説をおこなうと、かならず千人以上の聴衆が集まつたと伝えられている。これによつても、かれの仏典の講説がいかによつたものであつたかということがよくわかる。かれは北斉の鄴都の総持寺において七十二歳で歿したが、かれはそこで歿するまで東魏北斉の鄴都の仏教界において他の諸大乘經典とともに『華嚴經』の研究講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

北斉の首都鄴（河南省）において『華嚴經』の研究講説に関係のあつた人物としては、僧達が挙げられる。

僧達は、俗姓を李といい、上谷（河北省易県）の人で、北魏の延興五年（四七五）に生まれ、北斉の天保七年（五五六）に八十二歳で歿した。かれは十五歳で出家して、北代（山西省大同県）に遊学して仏典の講説を聴講した。かれは具足戒を受けてからもつぱら律（毘尼 *vinaya*）を宗軌とし、のち、北魏の孝文帝（四七一—四九九）によつて重んじられ、廟寺において『四分律』を弘宣した。そのち、僧達は、洛都（河南省洛陽県）におもむいて、インド僧ラトナマティ（*Ratnamati* 勒那摩提）に会つて、教えをうけた。その後まもなく、ラトナマティが亡くなり、僧達は、『十地論』を繰返し講説して、その名声は各地に響きわたつた。

のち、僧達は、光法師の『十地論』の講説を聞いて、その教説の論旨を明らかにし、師について菩薩戒を受けた。そのち、かれは徐州（江蘇省銅山県）へおもむいて、『十地論』の研究をおこなつた。かれは、梁の武帝（五〇二—五四九）が戦乱をおさめて仏教を弘めていることを知つて、揚子江を渡つて、勅命によつて重雲殿に入つた。かれは昼から夜にかけて連日七日間にわたつて、いまだ聞かざるところを伝えたために、武帝はひじょうによろこんだという。

その後、僧達は鄴都（河南省臨漳県）に帰って活躍したが、かれは『四分』『十地』『地持』などとともに『華嚴経』の講説をおこなったと伝えられている。かれは、これらの注釈書こそ書かなかったが、とくに議論をよくして、その名は中国の南北において知られていたという。それゆえに、かれによる『華嚴経』の思想的影響は、かれが遊歴した地域の人びとに及んだことはまちがいない。ただ、かれによるこの經典の思想的影響が最も顕著であったところはどこかといえ、それは、かれが晩年を過ごした北齊の首都鄴であったと考えて大過ないであろう。

梁陳の首都建康（江蘇省）において『華嚴経』の研究講説に従事した人物としては、慧勇が伝えられている。

慧勇は、俗姓を桓氏といい、その祖先は譙国竜亢（安徽省懷遠県）の人で、のちに呉郡呉県（江蘇省呉県）の東郷桓里に寓居した。かれは梁の天監十四年（五一五）に生まれ、陳の至徳元年（五八三）に六十九歳で歿した。かれははじめ首都建康へ出て、靈曜寺の則法師に依止したが、二十歳のときに静衆寺の峰律師について『十誦律』を学んだ。当時、竜光寺の僧綽と建元寺の法寵とともに建康仏教界に名を成していたが、慧勇はかれらについて『成実論』の研鑽につとめた。かれは三十歳になると盛んに仏典の講説をおこなったが、その講席には遠くから学徒が集まってきたと伝えられている。

陳の天嘉五年（五六四）に、慧勇は文帝に招かれて太極殿において仏典の講説をおこなった。この講説には多数の人びとが集まり、そのとき以来、かれはひじょうに有名になったといわれている。かれは晩年には大禪衆寺に住したが、そこで陳の至徳元年（五八三）に六十九歳で亡くなるまで約二十年間にわたってもっぱら仏教の弘布につとめた。

ところで、慧勇は、首都建康の仏教界において諸大乘経論とともに『華嚴経』の講説を二十回おこなったといわ

れているが、かれはこの經典の講説をいつごろおこなったのであろうか。かれは三十歳になると盛んに仏典の講説をおこなったと伝えられている。そうして、かれが三十歳のときはちょうど梁の大同十年、すなわち西暦五四四年に相当するから、かれが諸大乘經論とともに『華嚴經』を講説したのは、それ以後のことである。

それゆえに、慧勇が首都建康においてこの經典を講説したのは、少なくとも西暦五四四年から、かれが亡くなった西暦五八三年にいたるまでの約四十年間のうちのいずれかの時期においてであったと考えられる。ともかく、かれがこの約四十年間に首都建康において『華嚴經』の講説をおこなって、人びとの思想信仰に大きな影響を与えたことは、疑いない事実であると考えられる。

### 三

隋代の首都長安（陝西省）において『華嚴經』の研究講説に従事した人物としては、慧遠、道瑗、道貴、および靈幹が伝えられている。

慧遠は、俗姓を李氏といい、敦煌（甘肅省敦煌県）の人で、北魏の正光四年（五二三）に生まれ、隋の開皇十二年（五九二）に七十歳で歿した。かれは十六歳のときに湛律師に従って東魏の首都鄴へ行き、そこで大小乗の諸經論の研究に没頭した。かれは二十歳になると大隄律師について『四分律』を学んだが、北周の建徳六年（五七七）に武帝の廢仏によって北齊鄴都の仏教教団が壊滅したときには、汲郡（河南省汲県）の西山に隠棲して、三年間にわたって諸大乘經典を讀誦して仏道の修行にげんだ。

隋の開皇七年（五八七）ごろ、慧遠は、長安に招かれて、勅命によって興善寺に住し、それからまもなく建てら



れた淨影寺に住して、そこでもっぱら仏典の研究講説に従事した。そうして、かれは諸大乘經典の注釈書とともに『華嚴經』の注釈書を著わしたと伝えられているが、その注釈書ははたしていつごろどこで著わされたのであろうか。かれは二十八歳から五十五歳まで仏教が全盛をきわめる北齊鄴都の仏教界においてもっぱら仏典の研究講説をおこなっていたから、かれがこの期間にここで『華嚴經』の注釈書を著わしたことは疑いない。また、かれは隋の開皇七年には長安に招かれ、晩年の六年間をそこで過ごしたが、その間にも、かれは『華嚴經』を講説して、長安の人びとにその思想的影響を及ぼしたことはまちがいないと考えられる。

道璨は、恒州（山西省大同県東）の人で、『撰論』『十地』などの諸大乘經論とともに『華嚴經』の研究をおこなった。<sup>④</sup>のちに、かれは隋代の長安の勝光寺に住して活躍したので、かれによってこの時代にこの地方の人びとに『華嚴經』の思想的影響が及んだことは疑いない。

道貴は、并州（山西省太原県）の人で、諸大乘經典のうちでもとくに『華嚴經』の研究をおこなっていた。<sup>⑤</sup>晩年に、かれは隋代の長安の隨法寺に住して活動したので、かれの『華嚴經』の講説によってこの時代にこの地方の人びとの思想信仰が育まれたことはまちがいない。

靈幹は、俗姓を李氏といい、金城狄道（甘肅省狄道県）の人で、西魏の大統元年（五三五）に生まれ、隋の大業八年（六一二）に七十八歳で歿した。かれは十歳のときに法話を聞くことを楽しみ、寺に遊んで、背俗をよろこんだという。かれは十四歳で鄴京（河南省臨漳県）の大莊嚴寺の衍法師に投じて弟子となり、昼夜にわたって遵奉して、寸陰を怠ることがなかった。かれは講堂に入るときにはいつでも、天宮にいるときと同じ心的状態であったという。かれは十八歳のときに師によって講説された『華嚴經』や『十地經』を反復して講説し、初めて仏教の根本

真理を明らかにしてその研究にはげんだことが伝えられているが、それは北斉の天保三年（五五二）ごろのことであつた。二十歳になると、かれは具足戒を受けて、もっぱら律（毘尼 *vinaya*）の研究をおこなつた。

北周の武帝の廃仏（五七四—五七九）によって仁祠が廃滅したときにも、靈幹は、家において戒を奉じて、儀体を失うことはなかつた。そうして、隋代になつて仏教が復興すると、かれは勅命によって菩薩のなかに選ばれて、官より衣鉢を支給された。かれはこのように厚供を蒙つたけれども、なお俗人の姿をしていた。隋の開皇三年（五八三）に、かれは洛州（河南省洛陽県）の浄土寺において落髪したが、このときより出家のすがたをしたものが多くなつたという。

当時、海玉法師という人物が華嚴衆を構えていた。靈幹はこの華嚴衆において『華嚴經』の講説をおこなつたが、かれのその講説ぶりは、当時の中国の仏教の指導者たちによつて賞讃されたという。開皇七年（五八七）に、かれは勅命によつて長安の興善寺に住して、訳経証義の沙門となつた。大業三年（六〇七）には、長安に大禪定道場が置かれたが、靈幹は勅命によつてその道場の上座となつた。

このように、靈幹は華嚴衆において『華嚴經』の講説をおこなつたほどであるから、かれが長安を中心とした地域の人びとに及ぼした『華嚴經』の思想的影響はきわめて顕著であつたといわなければならない。

隋代の終南山（陝西省）において『華嚴經』の研究講説に従事した人物としては、彭淵、普濟、および普安が伝えられている。

彭淵は、俗姓を趙氏といい、京兆武功（陝西省武功県）の人で、西魏の大統十年（五四四）に生まれ、隋の大業七年（六一一）に六十八歳で歿した。かれは十三歳で出家して、のちに北周の武帝の廃仏に遭遇したが、隋代にな

って世の中が平和になると、かれは『地持』『十地』『涅槃』などの諸大乘經典とともに『華嚴經』の講説をおこなった。<sup>⑨</sup>そうして、かれによるこの經典の講説は主として終南山（陝西省長安県西）の至相寺においておこなわれたと考えられる。

普濟は、雍州（陝西省長安県西北）の北山の互の人で、はじめに出家して普円禪師に師事した。かれは人里離れて、ひとり林野において修行をおこなった。かれは山野を放浪するときにも、手から仏典を離したことはなかった。そうして、かれは諸大乘經典のうちでもとくに『華嚴經』を研究し誦誦していたといわれている。これによって、隋代の終南山において『華嚴經』の思想信仰が育まれていたことが知られる。<sup>⑩</sup>

普安は、俗姓を郭氏といい、京兆の涇陽（陝西省涇陽県）の人で、北魏の建明元年（五三〇）に生まれ、隋の大業五年（六〇九）に八十歳で歿した。かれは少くして普円禪師について出家し、世務を棄て去って乞食遊行した。のち、かれは靜藹法師に投じて、三蔵に精通して、諸大乘經典のうちでもとくに『華嚴經』の研究誦誦をおこなった。<sup>⑪</sup>

北周の武帝（五六〇―五七八）が廢仏を断行すると、普安は終南山の梗梓谷に隱棲した。のち、隋代になると、仏教が大いに興り、仏教僧たちがひろく全国各地から集められた。そのときに、梗梓谷に隱棲していた三十余僧は勅命によって再出家して、いずれもみな官寺に住せしめられた。しかし、普安はこのことをよろこぶだけで、みずからは名声を馳せることを好まなかった。かれはもとのまま山居して林壑を守った。かれは、ときどき村落を尋ねて生靈を恵益して、ついに煙霞のなかに寝て浮俗に接することはなかった。

普安の伝記の記述によると、普安は仏教思想のうちでもとくに『華嚴經』の思想に心の底から傾倒していたこと

が知られる。何か不思議な出来事に遭遇すると、普安は、いつでも人びとに対して「これは『華嚴經』の力である」といつて説明している。また、かれはもっぱら『華嚴經』を誦して、三衣一鉢によつていよいよ仏道の修行にはげんだと伝えられている。これによつて、かれは隋代に終南山を中心とした地域の人びとに『華嚴經』の思想的影響を与えたことがわられる。

隋代の鄭（河南省）において『華嚴經』の研究講説に關係のあつた人物としては、靈裕が挙げられる。

靈裕は、俗姓を趙といい、定州曲陽（河北省曲陽県）の人で、北魏の神龜元年（五一八）に生まれ、隋の大業元年（六〇五）に八十八歳で歿した。かれは十五歳で出家して、二十歳のときに東魏の首都鄭へ出て、そこで三年間にわたつて仏典の講説を聞いた。そうして、かれは一旦かれの故郷の定州へ歸つたが、その後ふたたび漳滏（河北省南部地方）に遊び、隱律師について『四分律』を學んだ。

北齊の文宣帝（五五〇—五五九）のころ、鄭都では仏教が盛んになり、そのころから靈裕はもっぱら『涅槃』『地論』などの諸大乘經論とともに『華嚴經』の研究をおこなうようになった。そうして、かれは北齊の河清三年（五六四）四十七歳のときに范陽（河北省定興県）へ行つて、そこで仏典の講説をおこなつた。のち、かれはふたたび北齊の鄭都へおもむいて、そこに宝山寺を建てた。北周の武帝の廢仏のときには、かれは同侶二十余人を引き連れて地方へ逃れたが、隋代になつて仏教が盛んになると、洛州（河南省洛陽県）の靈通寺にはいり、ついで鄭の大慈寺に移つた。かれはまた勅命によつて長安の大興善寺に住したが、その後まもなく鄭へ歸つて、晩年には安陽（河南省安陽県）の演空寺に住した。

靈裕は数多くの仏典の注釈書を著わしたが、そのなかに『華嚴經』の注釈書があつた。ところで、その注釈書は

いつごろどこで著わされたのであろうか。靈裕が諸大乘經論の著述を開始したのは三十歳（五四七）以後のことである<sup>⑧</sup>と伝えられているから、かれが『華嚴經』の注釈書を著わしたのは少なくともそれ以後のことであると考えなければならぬ。かれは三十歳以後には主として北齊の首都鄴に滞在していたが、かれはその時期にそこで『華嚴經』の思想的影響を受けて、その注釈書を著わしたと考えられる。その後、隋代の鄴においては、靈裕によって『華嚴經』の研究講説がおこなわれて、それがこの地方の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたことは疑いないとおもわれる。

隋代の江都（江蘇省）において『華嚴經』の研究講説に関係のあった人物としては、慧覺が挙げられる。

慧覺は、俗姓を孫氏といい、その祖先は太原晉陽（山西省太原県）の人で、江西の戦乱のときに丹陽の秣陵（江蘇省江寧県）へ移住した。かれは北齊の天保五年（五五四）に生まれ、隋の大業二年（六〇六）に五十三歳で歿した。かれは八歳で出家して、建康の興皇寺の法朗法師に師事した。その後、かれは撰山を訪れて栖霞寺に止まって、仏典の研究講説に従事した。

隋代になると、慧覺は、江都（江蘇省江都県）の慧日道場において盛んに仏典の研究講説をおこなった。のちに、かれは白塔寺に止まって、つねに仏典の講説をおこなった。かれは『大品』『涅槃』『四論』などの諸大乘經論とともに『華嚴經』の講説をおこなったが、そのときに学徒は講席に満ちあふれて、仏典の講説がこれほど盛んにおこなわれたことはなかった<sup>⑨</sup>という。これによって、慧覺が江都を中心とした地域において『華嚴經』の講説をおこなって、人びとの思想信仰を育んだことが知られる。

隋代の常州（江蘇省）において『華嚴經』の研究講説をおこなった人物としては、智珣が伝えられている。

智瑀は、俗姓を李氏といい、新安寿昌（浙江省寿昌県）の人で、正確な生存年時は不明であるが、唐の武徳二年（六一九）に歿したと伝えられている。かれは十九歳で出家して、まず坦師について仏典の講説を聞いた。そうして、かれは二十七歳のときから仏典の講説をはじめたといわれている。かれの伝記の記述によると、かれは亡くなる前に弟子に向かって、わたくしは『小品』『涅槃』『釈論』などの諸大乘経論とともに『華嚴経』の講説を始終おこなっていたと述べて、つづいて、それらの注釈書を弟子に書き残したことが伝えられているから、かれがその生涯を通じて『華嚴経』の研究講説をおこなったことはまちがいないとおもわれる。

ところで、智瑀が『華嚴経』の講説に従事したのは、いつごろのことであつたのであろうか。かれの明確な生存年時は明らかでないが、しかし、かれが歿したのは西暦六一九年であつたから、かれが『華嚴経』の講説をおこなつたのは、だいたい隋代においてであつたと考えられる。そうして、かれの活動範囲は、けっきょく常州（江蘇省武進県）を中心とした地域に限られていたので、かれによる『華嚴経』の研究講説は、主としてこの地域一帯においておこなわれたと考えて大過ないであらう。

#### 四

隋唐時代の首都長安（陝西省）において『華嚴経』の研究講説に関係のあつた人物としては、吉蔵と行等が伝えられている。

吉蔵は、俗姓を安氏といい、その祖先はパルティア（Parthia 安息）の人で、のちに中国へ移住したが、かれは梁の太清三年（五四九）に金陵（江蘇省江寧県）で生まれ、唐の武徳六年（六二三）に七十五歳で歿した。かれは

十二歳のときに父といっしょに興皇寺の法朗の講席に列席し、その翌年には法朗について『百論』を学んだ。かれは二十一歳で具足戒を受け、その名声は日増しに高くなつていった。陳末隋初に江陰（江蘇省）が乱れたときには、道俗はそれぞれ城邑を棄てて逃げ去つたが、吉蔵は弟子たちとともに仏典の注釈書を収集して、それらの整理をおこなつた。

隋代になつて世の中が平和になると、吉蔵は、東遊して会稽（浙江省紹興県）の嘉祥寺に止まり、そこで盛んに仏典の研究講説をおこなつて、『中論』『百論』『十二門論』などの注釈書を著わした。

隋の大業二年（六〇六）には、吉蔵は、勅命によつて揚州（江蘇省江都県）の慧日道場に任じて仏典の研究講説に従事した。この慧日道場において、かれは『華嚴経』の注釈書を著わした<sup>⑤</sup>。その後、長安の日嚴寺が完成すると、かれはそこへ移つて諸大乘経論の注釈書を著わしたが、かれの著わした諸経論の注釈書は、『華嚴経』の注釈書とともに盛んに世に流布したと伝えられている。

このように、吉蔵は諸大乘経論の注釈書とともに『華嚴経』の注釈書を著わしたことが明らかであるが、ここでとくに注目すべきことは、かれが『華嚴経』を研究してその注釈を完成したのは隋代においてであつたということである。かれは唐代の長安には五年ほどしか生存していなかつたが、しかし、この間においても、かれは、この経典の研究講説をおこなつて、人びとの思想信仰にかなり大きな影響を与えたことはまちがいないとおもわれる。

行等は、俗姓を吉氏といい、馮翊（陝西省大荔県）の人で、北周の天和五年（五七〇）に生まれ、唐の貞観十六年（六四二）に七十三歳で歿した。かれは十二歳で出家して、総法師に仕えてその弟子となつた。かれは、仏典の講説を終えると、いつも仏名を礼拝して、『華嚴経』を誦誦した。かれは、それによつて、人びとの障りが取り除

かれることが根本であると考えていた。<sup>③</sup>

このように、行等はもっぱら『華嚴經』を研究説誦していたことが知られるが、その研究説誦は、かれが西暦六四二年に亡くなるまで主として長安を中心とした地域においておこなわれて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。また、これによって、隋代から唐初へかけて長安を中心とした地域において『華嚴經』の研究説誦が盛んにおこなわれていたことが明らかである。

隋唐時代の襄州（湖北省）において『華嚴經』の研究説誦に関係のあった人物としては、慧眺が挙げられる。

慧眺は、俗姓を莊氏といい、出身地は明らかでないが、唐の貞観十三年（六三九）に八十余歳で歿した。かれは少くして小乗仏教を学んで、齊徐青海（山東省、江蘇省、安徽省一帯）の諸州に遊学して、とくに数論に精通して名声を馳せたといわれている。そうして、かれは隋の開皇の末年（六〇〇）に各地の遊学を終えて、襄州（湖北省襄陽県）へ帰って報徳寺に住した。

慧眺は、『大品』『法華』『維摩』『思益』『三論』などの諸大乘経論や『華嚴經』の注釈書をそれぞれ百部作製したと伝えられている。このように、かれが『華嚴經』の注釈書を百部作製したということは、かれがいかにかの經典に深い関心をもち、また、かれがいかにかの經典に説かれている思想信仰を人びとに伝えようと努力していたかということをよく示している。

ところで、慧眺は、この『華嚴經』の注釈書をいつごろどこで著わしたのであろうか。もしもかれが襄州へ帰ってこの經典の注釈書を著わしたとするならば、それは西暦六〇〇年以後のことで、隋代のことであったということになる。かれは、おそらく隋代に襄州においてこの經典の研究を完成して、その注釈書を著わし、唐代にはいつ



からは、もっぱらそこで他の諸大乘經論とともにこの經典の講説をおこなったと考えられる。

隋唐時代の余姚（浙江省）において『華嚴經』の研究講説に従事した人物としては、法敏が伝えられている。

法敏は、俗姓を孫氏といい、丹陽（江蘇省江寧県）の人で、陳の太建十一年（五七九）に生まれ、唐の貞觀十九年（六四五）に六十七歳で歿した。かれは八歳で出家して英禪師の弟子となった。ついで、かれは陳の首都建康へ出て、東安寺で仏典の講説を聞き勉強にいそしんだ。かれは陳が滅んだ（五八九）ときに還俗したが、三年後にはまた出家して難を避けて越州にはいり、余姚（浙江省余姚県）の梁安寺に住した。そうしてそこで、かれは絶えず諸大乘經論の講説をおこなっていた。のち、唐の貞觀元年（六二七）に、法敏は丹陽へ帰って、そこで二年間にわたって『華嚴經』と『涅槃經』の講説をおこなったと伝えられている。

また、越州の田都督は、法敏を一音寺に帰らせて、法輪を相續させたが、そのときに、義学の沙門は七十余州から八百余人集まり、当地の僧は千二百人、尼僧は三百人集まって、土俗の数は記すことができないほど多かったという。さらに、貞觀十九年（六四五）に、会稽（浙江省紹興県）の土俗は、法敏を静林寺に招請して、そこで、かれに『華嚴經』を講説せしめた<sup>④</sup>と伝えられている。

このようにして、法敏は、西暦六二七年に余姚を去って丹陽へ行き、そこに二年間滞在して、『華嚴經』の講説をおこなった。そうして、かれはふたたび越州（浙江省紹興県）へ帰り、西暦六四五年に六十七歳で歿するまでの約十七年間をこの地方で過ごした。それで、かれがこの間に越州地方において『華嚴經』の講説をおこなって、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたことは疑いないとおもわれる。

唐代の并州（山西省）において『華嚴經』の研究講説に関係のあった人物としては、慧覺が挙げられる。

慧覺は、俗姓を范氏といい、齊（山東省）の人で、北魏の中興元年（五三二）に生まれ、唐の武徳三年（六二〇）に九十歳で歿した。かれは『十地』などの諸大乘經典とともに『華嚴經』の研究講説を山東地方において盛んにおこなった。隋の開皇元年（五八一）に并州（山西省太原県）に武徳寺が建てられると、かれはその寺に招かれて、そこでは主として『華嚴經』の研究講説をおこなった。そうして、慧覺は『十地』『維摩』などの諸大乘經典や『華嚴經』の注釈書を著わした。

ところで、この『華嚴經』の注釈書はいつごろ著わされたのであろうか。慧覺は西暦六二〇年に九十歳で歿したといわれているから、かれがこの經典の注釈書を著わしたのは、少なくとも西暦六二〇年以前のことであつたと考えられる。かれは唐代にはわずか二年しか生存していないので、かれが実際に『華嚴經』の注釈書を著わして、人びとにその思想的影響を与えたのは、北齊時代か、または隋代のことであつたと考えられる。かれの唐代における生存年時はわずか二年ほどであつたが、しかしこのころ、かれは并州の武徳寺に住していたから、かれがこの地方の人びとに『華嚴經』の思想的影響を与えたことは疑いないとおもわれる。

唐代の河東（山西省）において『華嚴經』を最も尊重した人物としては、恵仙が伝えられている。

恵仙は、俗姓を趙といい、河東蒲坂（山西省永濟県）の人で、隋の開皇元年（五八一）に生まれ、唐の永徽六年（六五五）に七十五歳で歿した。かれは幼いころ出俗のころを抱いたが、その因縁が熱さず、四十歳のときにやっと念願を果たして出家することができた。出家ののち、かれは諸大乘經典のうちでもとくに『華嚴經』と『涅槃經』を最も尊重していたことが知られる。

恵仙は、主として河東（山西省永濟県）を中心とした地域において活躍したと考えられる。そうして、かれは四

十歳のときに出家したといわれており、かれの四十歳のときは、ちょうど唐の武徳三年で、西暦六二〇年に相当する。それゆえに、かれによる『華嚴經』の思想的影響は、かれが西暦六五五年に七十五歳で亡くなるまでの約二十六年間にわたって河東を中心とした地域の人びとに及んでいたと考えられる。

唐代の終南山（陝西省）において『華嚴經』の研究講説をおこなった人物としては、智正と弘智が伝えられている。

智正は、俗姓を白氏といい、定州安喜（河北省定県）の人で、北周の武成元年（五五九）に生まれ、唐の貞觀十三年（六三九）に八十一歳で歿した。かれは十一歳のときにすでに出家の志を抱いていたという。隋の開皇十年（五九〇）に、広く天下の英賢をさがし求めていた文帝は、曇遷禪師とともに智正を宮廷に招いて歓待し、勝光寺に住せしめた。のち、智正は終南山の至相寺の淵法師に師事して、そこに二十八年間留まって、その間に頼まれれば仏典の講説をおこない、それ以外のときにはもっぱら仏道の修行にはげんでいたと伝えられている。

智正は、『撰論』『楞伽』『勝鬘』『唯識』などの諸大乘經論とともに『華嚴經』の講説をししばおこなったが、その講説は主として終南山の至相寺においておこなわれたと考えられる。それゆえに、かれによって、この經典の思想的影響がこの地方の人びとに及んだことは疑いない。

また、智正は『華嚴經』の注釈書十巻を著わしたが、それはどこで著わされたのであろうか。かれは二十八年間にわたって終南山の至相寺において仏典の講説をおこなったと伝えられているから、かれがそこでその注釈書を作製したことはまちがいないであろう。

弘智は、俗姓を万氏といい、始平槐里郷（陝西省興平県）の人で、隋の開皇十五年（五九五）に生まれ、唐の永

徽六年（六五五）に六十一歳で歿した。かれは隋の大業十一年（六一五）二十一歳のときに、かりに道士となつて、終南山に入つて粒を絶ち氣を服して修行したが、身体は衰弱した。そこで、かれは長安の靜法寺に行つて、惠法師に會つて、修行の方法を尋ねた。惠法師はかれに感づてはならないと言つて、安心の要諦を教えられたという。

かくして、弘智は隋の義寧元年（六一七）にふたたび終南山に入つて修行した。唐の武徳の初め（六一八）ごろになると、仏教と道教とが並び興つたが、弘智は仏教を信奉して、幽栖を楽しみ、終南山の至相寺に住した。かれはここで『撰論』などの諸大乘經論とともに『華嚴經』の講説をおこなつた<sup>④</sup>。

ところで、かれがこの地域の人びとに『華嚴經』の思想的影響を与えたのは、いつごろのことであつたのであろうか。それは、かれが終南山の至相寺に住した武徳の初め（六一八）ごろから同寺において歿した永徽六年（六五五）にいたるまでの約三十八年間においてであつたと考えられる。

唐代の汴州（河南省）において『華嚴經』の研究講説に關係のあつた人物としては、神照が伝えられている。

神照は、俗性を淳といい、汴州中牟（河南省中牟県）の人で、はつきりした歿年は明らかでないが、唐の貞観年間（六二七―六四九）に五十九歳で歿したといわれている。かれは十二歳のときに明智律師について出家した。當時、明智律師のところには中国各地から多くの学徒が集まつていた。隋代になつて世の中がようやく平和になつたとはいえ、食糧はいまだ充分ではなかつた。それで、神照はその学徒たちに食糧を調達するために村や町を走りまわつた。かれは六年間これを續けて、この間に夜になると諸大乘經典の講説をおこなつた。また、かれは鄴都（河南省臨漳県）へ行つて、休法師について『撰大乘論』の講説を聞いた。さらに、許州（河南省許昌県）の空法師のところへ行つて、『雜心論』の講説を聞き、その後、『涅槃』『成実』『雜心』などの諸經論とともに『華嚴經』

の講説をおこなった。

ところで、神照が『華嚴經』の講説をおこなったのは、いつごろのことであったのであろうか。かれは日中はかれの師のところに集まった学徒に食糧を供給するために働き、夜はもっぱら諸大乘經典の講説をおこなったという。それは、かれが十二歳で出家してから六年間つづいたというから、少なくとも十八歳までのことであったと考えられる。かれは唐の貞觀年間に五十九歳で歿したといわれているから、もしもかれが貞觀の末年（六四九）に歿したとするならば、かれが十八歳のときは隋の大業四年（六〇八）で、かれが『華嚴經』の講説に従事していたのは、西暦六〇八年ごろまでであったということになる。しかし実際には、それ以後においても、この經典の講説はおこなわれていたにちがいない。かれは汴州の近くの中牟で生まれ、青年時代には鄭都や許州を遊歴したが、しかし、その活動範圍はけっきょく汴州を中心とした地域に限られていたので、かれが『華嚴經』の研究講説をおこなったのは、主としてこの地域一帯においてであったと考えられる。

唐代の越州（浙江省）において『華嚴經』の研究講説に従事した人物としては、慧持が挙げられる。

慧持は、俗姓を周といい、汝南（河南省汝南県）の人で、陳の大建七年（五七五）に生まれ、唐の貞觀十六年（六四二）に六十八歳で歿した。かれは、はじめ丹陽（江蘇省江寧県）の開善寺へ行って、満法師に投じて沙弥となった。ついで、かれは東安寺の莊法師の仏典の講説を聞き、また高麗の実法師について『三論』の講説を聞いて、仏教に対する理解を深めた。かれはまた仏教のみならず、中国の伝統的な学問である『老』『莊』『易』などを善くしたが、隋末には、戦乱を避けて越州（浙江省紹興県）へ行き、弘道寺に住して、つねに『大品』『涅槃』などの諸大乘經典や『莊』『老』などとともに『華嚴經』の講説をおこなったといわれている。

このようにして、慧持は、越州の弘道寺に止まって、三十年間にわたってそこを出ることなく、『華嚴經』などの仏典の研究講説に従事したことが明らかであるから、この間に、かれによって越州地方の人びとに『華嚴經』の思想的影響が及んだことはまちがいない。

## 五

以上に検討したように、『華嚴經』は、六朝時代においては、河南省の北端に位する鄴、同じく河南省の西北部に位する嵩山、および江蘇省の南西部に位する建康を中心とした地域において研究され講説されて、これらの地域の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたとおもわれる。

また、隋唐時代を通じて『華嚴經』の研究講説がおこなわれたのは、陝西省のやや南部に位する長安、長安のやや南に位する終南山、山西省の中部に位する并州、同じく山西省の南西部に位する河東、河南省の北端に位する鄴、同じく河南省の北部に位する汴州、湖北省の北部に位する襄州、江蘇省の南西部に位する江都、同じく江蘇省の南部に位する常州、浙江省のやや東北部に位する越州、および同じく浙江省の東北部に位する余姚を中心とした地域においてであった。そうして、これらの地域におけるこの經典の思想的影響はひじょうに顕著であったと考えられる。

これらの地域のうちで、六朝時代を通じて『華嚴經』の研究講説が最も盛んにおこなわれたところはどこかといえ、それは東魏北斉の首都鄴であり、また、隋唐時代を通じてこの經典の研究講説が最も盛んにおこなわれたところは首都長安およびその南に位する終南山であった。それゆえに、この時代には『華嚴經』の研究講説者の多く

が、鄴、長安、および終南山に在住して、諸大乘經典とともにこの經典の研究講説をおこなっていたから、この經典は、この時代には少なくとも鄴、長安、および終南山を中心とした地域において最もよく研究され講説されて、これらの地域一帯の人びとの思想信仰にひじょうに大きな影響を与えたと考えられる。

註

- ① 『大方広仏華嚴經』六十卷は、大正藏經、九卷、三九五頁上―七八八頁中に収められている。
- ② 『大方広仏華嚴經』八十卷は、大正藏經、一〇卷、一頁中―四四四頁下に収められている。
- ③ 『大方広仏華嚴經』四十卷は、大正藏經、一〇卷、六六一頁上―八四九頁上に収められている。
- ④ 顓、法侶鷲鴻、釈門龍象、華嚴、十地、冠絶漳流（『統高僧伝』卷九、智脱伝、大正藏、五〇卷、四九八頁下）。
- ⑤ 初住嵩高、少林寺、依資雲公、開胸律要、并及華嚴、大論、前後參聽、並扣其関戸、渙然大明（『統高僧伝』卷二十一、洪遵伝、大正藏、五〇卷、六一一頁中）。
- ⑥ 從猷公、聰法華、華嚴、宗匠前修、是非衡術（『統高僧伝』卷八、僧範伝、大正藏、五〇卷、四八三頁下）。
- ⑦ 講華嚴、十地、地持、維摩、勝鬘、各有疏記（『統高僧伝』卷八、僧範伝、大正藏、五〇卷、四八三頁下）。
- ⑧ 講十地、地持、華嚴、維摩、並立疏記（『統高僧伝』卷八、慧順伝、大正藏、五〇卷、四八四頁中）。
- ⑨ 講華嚴、四分、十地、地持（『統高僧伝』卷十六、僧達伝、大正藏、五〇卷、五五三頁中）。また、慧光という人物が北斉の鄴都の大覺寺において『華嚴經』の研究講説をおこなって、その注釈書を著わしている（其華嚴、涅槃、維摩、十地、地持等、並疏其奥旨、而弘演導、『統高僧伝』卷二十一、慧光伝、大正藏、五〇卷、六〇七頁下）。
- ⑩ 雖無疏記、而敷揚有捃、特善論議、知名南北（『統高僧伝』卷十六、僧達伝、大正藏、五〇卷、五五三頁中）。また、曇遷は、北斉時代に林慮山（河南省林県西）の淨国寺にしばらく隠遁していたが、そのときに、かれが『華嚴經』などの諸大乘經典の研究講説をおこなっていた（有來請問、乍為弘宣、研精華嚴、十地、維摩、楞伽、地持、起信等、咸究其深蹟、『統高僧伝』卷十八、曇遷伝、大正藏、五〇卷、五七二頁上）ことが伝えられている。
- ⑪ 自始至終、講花嚴、涅槃、方等、大集、大品、各二十遍、智論、中、百、十二門論、各三十五遍、余有法花、思益等教部、

不記(『統高僧伝』卷七、慧勇伝、大正蔵、五〇卷、四七八頁中下)。

⑫ 至年三十、法輪便転、自此、遠致学徒、盛開講肆(『統高僧伝』卷七、慧勇伝、大正蔵、五〇卷、四七八頁中)。

⑬ 隨講出疏、地持疏五卷、十地疏七卷、華嚴疏七卷、涅槃疏十卷(『統高僧伝』卷八、慧遠伝、大正蔵、五〇卷、四九一頁下)。

⑭ 鑽求撰論、華嚴、十地、深疑伏旨、解其由緒(『統高僧伝』卷二十六、道璨伝、大正蔵、五〇卷、六六九頁下)。

⑮ 華嚴為業(『統高僧伝』卷二十六、道貴伝、大正蔵、五〇卷、六七〇頁中)。

⑯ 十八、覆講華嚴、十地、初開宗本、披会精求(『統高僧伝』卷十二、靈幹伝、大正蔵、五〇卷、五一八頁上)。

⑰ 有海玉法師、構華嚴衆、四方追結、用興此典(『統高僧伝』卷十二、靈幹伝、大正蔵、五〇卷、五一八頁中)。

⑱ 幹、即於此衆、講釈華嚴、東夏衆首、咸共褒美(『統高僧伝』卷十二、靈幹伝、大正蔵、五〇卷、五一八頁中)。

⑲ 自華嚴、地持、涅槃、十地、皆一聞無墜、歷耳便講(『統高僧伝』卷十一、彭淵伝、大正蔵、五〇卷、五一二頁中)。

⑳ 常説華嚴、依而結業(『統高僧伝』卷二十七、普濟伝、大正蔵、五〇卷、六八〇頁下)。

㉑ 晚投講法師、通明三藏、常業華嚴、説誦、禅思、唯為標擬(『統高僧伝』卷二十七、普安伝、大正蔵、五〇卷、六八一頁上)。

㉒ 安日、今蒙免難、乃惟花嚴力耳(『統高僧伝』卷二十七、普安伝、大正蔵、五〇卷、六八一頁中)。安日、華嚴力也、未足異之(同上、六八一頁中)。安日、余不知、蓋華嚴力乎(同上、六八一頁下)。

㉓ 性多誠信、衆説華嚴、一鉢三衣、累紀弥励(『統高僧伝』卷二十七、普安伝、大正蔵、五〇卷、六八二頁上)。

㉔ 自此專、業華嚴、涅槃、地論、律部、皆博尋旧解、穿鑿新異(『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、五〇卷、四九五頁下)。

また、北斉時代に皇后が病氣にかかり、そのために、靈裕法師が『華嚴経』の講説を要請された(会齊后染患、願講華嚴、昭玄諸統、挙裕、以当法主、『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、五〇卷、四九五頁下)ことが伝えられている。さらに、靈裕の弟子で、師の『華嚴経』の研究講説に関係のあった人物としては、道昂と曇采が挙げられる。道昂は相州(河南省臨漳県)の寒陵山寺において『華嚴経』や『十地論』などを講説していた(常於寒陵山寺、陶融初教、綱領玄宗、日照高山、此焉収属、講華嚴、地論、稽洽博詣、才弁天垂、『統高僧伝』卷二十、道昂伝、大正蔵、五〇卷、五八八頁中)といい、曇采は靈裕法師の『華嚴経』の講説を聞きに行つて、仏教の偉大な真理をさとつて、その弟子になった(因、靈裕法師、講華嚴経、試往聴之、便悟宏範、略其詮致、乃投裕、『統高僧伝』卷二十、曇采伝、大正蔵、五〇卷、五八九頁上)という。

㉕ 初造十地疏四卷、地持、維摩、波若疏各同卷、華嚴疏、及旨婦合九卷、涅槃疏六卷(『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、



五〇卷、四九七頁下。

②⑥ 自年三十、既存著述（『統高僧伝』卷九、靈裕伝、大正蔵、五〇卷、四九七頁下）。

②⑦ 後止白塔、恒事敷説、大品、涅槃、華嚴、四論等、二十余部、遍数甚多、学徒滿席、法輪之盛、莫是過也（『統高僧伝』卷十二、慧覺伝、大正蔵、五〇卷、五一六頁中）。

②⑧ 年二十七、即就敷講（『統高僧伝』卷十二、智瑠伝、大正蔵、五〇卷、五二一頁中）。

②⑨ 亡前謂日、吾以華嚴、大品、涅槃、釈論、此之文言、吾常吐納、今以四部義疏、付屬於汝（『統高僧伝』卷十二、智瑠伝、大正蔵、五〇卷、五二一頁中）。

③⑩ この『華嚴経』の注釈書は『華嚴遊意』一卷として大正蔵経、三五卷、一頁十一—三頁中に収められている。

③⑪ 講三論、一百余遍、法華、三百余遍、大品、智論、華嚴、維摩等、各数十遍、並著玄疏、盛流於世（『統高僧伝』卷十一、吉藏伝、大正蔵、五〇卷、五一四頁下）。

③⑫ 每講後、常礼仏名、乃説華嚴、以為消障之本也（『統高僧伝』卷十五、行等伝、大正蔵、五〇卷、五四三頁上）。

③⑬ 造華嚴、大品、法華、維摩、思益、仏蔵、三論等、各一百部（『統高僧伝』卷十五、慧眺伝、大正蔵、五〇卷、五三九頁下）。

③⑭ 貞觀元年、出還丹陽、講華嚴、涅槃二年（『統高僧伝』卷十五、法敏伝、大正蔵、五〇卷、五三八頁下）。

③⑮ 至十九年、会稽士俗、請住静林、講華嚴経（『統高僧伝』卷十五、法敏伝、大正蔵、五〇卷、五三八頁下）。

③⑯ 著華嚴、十地、維摩等疏、并續義章、一十三卷（『統高僧伝』卷十二、慧覺伝、大正蔵、五〇卷、五二一頁上）。

③⑰ 既出家後、随方問津、雖多涉獵、然以華嚴、涅槃二部、為始卒之極教也（『統高僧伝』卷二十、惠仙伝、大正蔵、五〇卷、六〇〇頁中）。

③⑱ 因留同住、二十八年（『統高僧伝』卷十四、智正伝、大正蔵、五〇卷、五三六頁中）。

③⑲ 講華嚴、撰論、楞伽、勝鬘、唯識等、不紀其遍（『統高僧伝』卷十四、智正伝、大正蔵、五〇卷、五三六頁下）。

④① 製華嚴疏十卷（『統高僧伝』卷十四、智正伝、大正蔵、五〇卷、五三六頁下）。

④② 講華嚴、撰論等（『統高僧伝』卷二十四、弘智伝、大正蔵、五〇卷、六四二頁中）。

④③ 涅槃、華嚴、成実、雜心、隨機便講、曾不辭退（『統高僧伝』卷十三、神照伝、大正蔵、五〇卷、五二九頁上）。

④④ 常講三論、大品、涅槃、華嚴、莊老、累年不絶（『統高僧伝』卷十四、慧持伝、大正蔵、五〇卷、五三七頁下—五三八頁上）。

④ 不出寺門、將三十載（『続高僧伝』卷十四、慧持伝、大正蔵、五〇卷、五三八頁上）。

〔本稿は、昭和五十七年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。〕